

## 「つまづかない者は幸いである」

マルコによる福音書 15章 25 - 32節

森島 牧人 牧師

ゴルゴタに着くと兵士は、苦痛を和らげる没薬入りのぶどう酒を主イエスに飲ませようとしますが主はこれを拒否されます。これは、御自分の飲むべき苦い杯をはっきりとした意識をもって飲み干そうとされていたことでした。午前9時、兵士たちはそんな主イエスを十字架につけ、その下でくじ引きをして主の衣服を分け合ったと聖書にあります。これは詩篇 22：18-19の「骨が数えられる程になったわたしのからだを 彼らはさらしものにして眺め わたしの着物を分け 衣を取ろうとしてくじを引く。」の成就でした。

この時、主イエスの左右には主と同じように釘で十字架に打ち付けられた二人の強盗がいました。主を真ん中にしての三人は表面的には同じ苦しみを味わっていたことになりませんが、大きな違いは主イエスが「ユダヤ人の王」という罪状で処刑されることにありました。この王であり、神の御子であるお方が私たちに代わって罪人として苦難を受け、十字架上で死んでくださったからこそ私たちの救いはあるのですが、聖書には、通りかかった人々・祭司長・律法学者たちが主イエスを侮辱してののしり「メシア、イスラエルの王、今すぐ十字架から降りるがいい。」と言った（マルコ 15：29-32）とあります。

さて、そもそもなぜ主イエスは私たちにとって救い主なのでしょう。その証拠・しるしは何処にあるのでしょうか。主イエスを救い主と信じない人がこの「しるし」を問うことは当然ですが、主イエスを救い主と信じている者が同じことを問うとすれば「信仰者」とは一体何なのかということになります。つまりそれはとっぴりとお湯につかりながら、「自分は今お湯に入っているのだろうか」と自問自答するようなもので、「信じる」とだけ言い切れればいいものを、なんとかしてその「しるし」を得たい、表現したい、人々を納得させたいというところから脱け出せず、もがいているのが私たちかも知れません。

マルコ福音書を続けて読む中で、私たちは主イエスの「力ある業」が「奇跡」という形で記されていることを学びました。獄中のバプテスマのヨハネの遣わした弟子に対し主イエスは「行って、見聞きしたことをヨハネに伝えなさい。目の見えない人は見え、・・・死者は生き返り、貧しい人は福音を告げ知らされている。わたしにつまづかない人は幸いである。」（ルカ 7：22-23）とお答えになっています。主がいわれたどれもが旧約で預言されている救い主の「しるし」であるのですが、それなら何故その力ある業・しるしを私たちの目の前にもっと見せて下さらないのかとの思いがします。しかし、主はむしろ奇跡を行われる度に口止めをし、興奮する弟子を鎮め、奇跡を求める群衆を避けておられる、しかも奇跡は十字架の出来事が近づくに連れて影を潜めて行くのです。

何故主は求めに応じて十字架から降りようとされなかったのか。そこにはゲッセマネの祈りに於ける闘いを経て合意に至った主イエスと神との意志があるのですが、さらにこの「奇蹟を行わない救い主」は、悪魔にひれ伏されなかった荒野の試みの時の「しるしを行わない主」の姿として既にあり、それこそが本当の救い主の姿だと思われるのです。

これは「権威ある新しい教え」についても同じで、時を超えて人間の心を打ち、慰め支える主イエスの鋭く深い教えはまさに救い主のしるしと言えますが、それでは何故主はもっと強力に人々に教え、説得されなかったのか。そして何よりもこの十字架上で神に向かい「わが神、わが神、なぜわたしをお見捨てになったのですか。」（同 15：34）と叫ばざるを得なかったのか。ここにあるのは「権威ある新しい教え」をなさる主イエスではなく、何も教えない主、言葉もなく叫びとともに絶命される主イエスの姿です。

ここで気づかされるのは、主の奇跡や教えは「十字架の光」の中に位置づけられる以外にはあり得ないということです。「神は愛なり」は主の十字架と復活の出来事の結合の中に明らかになっています。確かに主の奇跡と教えは旧約の預言の成就ですが、主イエスが真の救い主であるということは、どこかでその預言の成就の範疇をはみ出している、遙かに越えていると言わざるを得ないのです。つまり十字架というのは、しるしから最早自由になったところ、しるしを何一つ必要としない「しるし」として打ち立てられていることが分かるのです。主イエスは、宗教に共通している「しるし」などはないという仕方で、人間を宗教から自由にしてくださっているのではないかと、「もう、しるしを求めることはないよ」と言ってくださる方としての「イエス・キリスト」となってくださっているのではないかと思われるのです。

（説教要約 羽入田悦子）